

訪問リハビリテーションにおいて家事活動に取り組んだ脳出血右片麻痺の57歳女性

ゆきよしクリニック 作業療法士 大越 満 (OT), 小野明子 (OT), 山口幸子 (OT)

Key words : 家事, 訪問リハビリテーション, カナダ作業遂行測定

[はじめに]脳出血を発症し6年が経過したこの症例は、病前に主婦としての役割があった。この度、訪問リハビリテーション（以下、訪問リハ）において家事活動に取り組んだ。その結果、いくつかの活動を初めて自力で行うことができるようになり同時に主観的満足度は向上した。今回この症例を報告する。なお、今回の報告に際しこの症例から同意を得た。

[症例] Tさん. 57歳女性. 平成14年4月に左脳内出血による右片麻痺と、軽度の運動性失語症を呈した。1か月後に転院した病院でリハビリテーションを経験し発症から7か月後に自宅に退院した。自宅内は四点杖にて移動し、一人では屋外に出ない。失語症は喚語が時に困難であるが日常会話上の言語理解、計算に問題は無い。右上肢は屈曲共同運動に支配されているものの、側方つまみが可能であるため補助的に使用することができる。ADLはバーセルインデックス85点で、減点は更衣と階段昇降であった。入院中は家事活動ならびに家事活動に必要な模擬動作を練習しなかった。退院後、介護保険による通所サービスを週に4日利用し、約5年半継続してきた。平成20年4月、サービス担当者会議において夫が「週に4日もリハビリに通っていても、家で身になることが一つもない」と発言したことがきっかけで介護支援専門員のプランニングにより訪問リハを実施することになった。これまでに訪問リハの経験はなかった。

[訪問リハの経過] 訪問リハは筆者が担当した。5月から週に1回、1回につき約45分間、合計12回実施した。訪問リハで取り組みたい家事活動の内容と、その「重要度、遂行度、満足度」をカナダ作業遂行測定（以下、COPM）により聴取した。Tさんの重要度が高かったのは「掃除をすること」「洗濯をすること」「食事を作ること」「アイロンをかけること」の4つであった。そこで訪問リハでは「掃除機がけ」「洗濯物を干し場まで運ぶこと」「洗濯物を干すこと」「調理すること」「食器を流し場まで運び、食器洗浄機に入れること」「テーブルを拭くこと」「アイロンをかけること」を行った。COPMは訪問リハの初回時（5月14日）と、約2か月半後（7月30日）に測定した。その結果、Tさんが重要であるとした4つの家事活動すべての遂行度と満足度は向上した。「掃除をすること」の遂行度は1から8、満足度は3から8に、「洗濯をすること」の遂行度は2から3、満足度は2から8に、「食事を作ること」の遂行度は1から3、満足度は1から5に、「アイロンをかけること」の遂行度は1から5、満足度は1から5にそれぞれ向上した。
[考察]訪問リハは身体機能維持のためのプログラムに主眼が置かれ、長期間実施されることが少なくない。その症例は約2か月半家事活動にのみ取り組んだ。生活に必要な活動を直接生活の場において取り組むことができることが、訪問リハの最も重要な役割の一つであると筆者は考える。

表 カナダ作業遂行測定 (COPM) の結果 *10点満点

課題	初回評価 (5月14日)			再評価 (7月30日)	
	重要度	遂行度	満足度	遂行度	満足度
1. 掃除をすること	10	1	3	8	8
2. 洗濯をすること	10	2	2	3	8
3. 食事を作ること	10	1	1	3	8
4. アイロンをかけること	8	1	1	5	5